

ドゥーエー神学院の活動と迫害

— エリザベス治世とカトリック教徒 (2) —

川 村 大 膳

目 次

- 一、破門勅書の影響について
- (1) 法的不備
- (2) 国内外の大反響
- 二、大陸におけるイギリス神学院
- (1) ドゥーエー神学院の建設
- (2) 殉教教育
- (3) その他の施設
- 三、イングランドにおける迫害の開始
- (1) 宗教改革運動の推移
- (2) グレゴリウス教皇の積明

本稿は、「レグナンヌ・イン・エクセルシス」について——エリザベス治世とカトリック教徒(1)——(関西学院史学第十六号昭和五〇年三月三十一日 四六―七〇頁)の続篇であり、なおこの後続篇も予定している。詳細な文献目録は前掲論文を参照されたい。

一 破門勅書の影響について

(1) 法的不備

教皇ピウス五世によるエリザベス女王破門の勅書「レグナンス・イン・エクセルシス」に関して、破門は事前の予告が必要なこと、破門後一カ年間王位の罷免はあり得ないこと、という二点の法的不備が指摘された。これに対する教会の法的見解は⁽¹⁾、破門の予告を要するのはその判決が公けにされねばならぬ必要のある場合であり、事実上破門されているものに対する判決については、あらかじめ警告するに及ばず、エリザベスが異端であり異端の保護者であることは周知のことで、事実上破門されたも同様である故に、改めて警告を要しないものとした。これに対して既述のごとく、ローマに忠実にすれば女王に叛逆的になるといふ苦しい立場にあるイングランドのカトリック教徒達は、勅書を無効にせんと願うあまりに、右の考えは一般論であつて異端王の場合は警告のあるのがならわしであるとし、またエリザベスについては異端の内容に異論があり、裁判に当たつた人々の中にもその点で疑問を残すものがいたといふ証拠を申し立てた。

つぎに破門と罷免を同時に行う点について、教会法は明らかにこれを禁じ一カ年の間隔を必要としている。そもそも宗教上の破門と王位の非合法性とを同時に扱うことから不合理が存するわけであるが、本勅書はエリザベスをその出生から詐りの女王⁽²⁾とのべており、したがつて後に出てくる罷免は、教皇が彼女から王国の詐りの統治権を奪うことで、その罷免は実質を伴わないとした。これは一応勅書の文言上の矛盾を指摘したことにはなるが、即位以来十年間エリザベスと外交交渉を重ねて来たピウス五世は、事実上詐りの女王を相手にしていたのではない。要するに正義

感のみによって出来たこの勅書には、以上のような文言上の法的不備がみとめられるけれども、それがイングランドのカトリック教徒が期待する勅書の無効に実質的につながるものではない。フェリペ二世が政治的配慮から慎重を期し、トレント公会議も推進出来なかったことをピウス五世は実施した。その結果教皇は援けようとして手をさした人々を、悲惨な運命におとし入れることになった。

ローマがいかにイングランドの事情に疎かったかという事例の一つに、エリザベスがヘンリー八世の用いた教会の首長 *Supremum Caput, Supreme Head* なる語を極力排していたことに、考察が及ばなかったことがあげられる。エリザベスの国王至上法には女王の地位を教会の最高管理者 *Supreme Governor* であるとし、ヘンリーのそれとは明らかに異なる態度をとった。また議會制定法その他の公文記録において、彼女を教会の首長と表現しているものはなく、彼女は自ら強く否定したタイトルのために破門されたともいわれる。ローマとしては女王を改宗させるか、さもなければヨーロッパにおけるローマの協力者をあげて、エリザベスを抑圧するかのいずれかを考えており、女王とそのまま共存する気はなく、勅書の後にも女王の改心を期待していたことは事実である。

(2) 国内外の大反響

勅書に法的不備があってもなくても大きい波紋が国内あるいは全ヨーロッパにひろがった。歴史家は教皇の諸国民に及ぼす無制限権力についての害悪を、聖職者は神学的過誤を、パンフレティアは激越に嘲笑的に知識層へ呼びかけた。とくにプロテスタント側に立つ論者は、国民の忠誠の誓いをとりあげる権力を一人の人間に与えることを、神を冒瀆する教義であると強調した。さらにエリザベス王位の正統性否定については大きい抵抗がおこり、統治者の真の正統性は人民に対する愛情によって示されるとの主張が行われた。国民感情は女王に対する忠誠心を呼び起

こし、ローマの落雷によってそれが燃え上ったとさえいわれる。この国民感情がアングリカニズムと結ばれ、女王の敵はすなわち神の敵となり、説教台からは女王支持の愛国心が説かれ、敵の破滅のために祈りがささげられた。ちなみに勅書に対する罵詈、嘲笑、憎悪の非難がたかまり、カトリック教会に対して最大の侮蔑の言葉が投げかけられた。イギリス国民に反カトリックの心情を刻みこむのにこれ以上のものはなく、十七世紀初頭の火薬陰謀事件⁽⁶⁾にまさるといわれる。一世紀後の「教皇党の陰謀⁽⁷⁾」のごとく、イギリス王家に対するでっちあげのカトリック陰謀説がまかり通る状態がつづき、寛容の時代に入ってもその態度は容易に緩和されなかつた。

勅書がかりに効果をあげるとすれば、それはヨーロッパ諸国が教皇に同調し、イングランドとの友好関係を絶ち、商業的には大陸封鎖をもってイングランドを孤立させることであろう⁽⁸⁾。しかし当時すでにプロテスタント諸国が成長し、カトリック諸国に対する教皇権のウエイトにも大きい変化がみられ、それらの諸国にイングランドとの外交関係を絶たしめるだけの力は考えられず、商業取引を停止させることはさらに困難な状況にあった⁽⁹⁾。当代のイングランドのカトリック教徒がそれを望み、教皇の外交がそれを目指したとすれば、十六世紀の時代錯誤といわれてもやむをえない⁽¹⁰⁾。

国内においてカトリック教徒が従来より強く監視されるようになったのは当然であろう。一五七一年のはじめウィリアム・セシルは功によって貴族にあげられ、パーリー卿となった。爾来彼の鉄腕が余すところなく發揮され、教会と国家の統一政策が積極化することによってイングランドのカトリック教徒の立場はきわめて苦しいものになった。一五七一年七月一日の反勅書法⁽¹¹⁾によれば、イングランドに「ローマの司教」の勅書または書かれた宣言文を実施するためにもちこんだものは誰でも、その内容の如何に拘らず叛逆罪として生命・財産を剝奪するというきびしいものであった。同時にスパイ・密告の制度が導入されて情報提供者には報酬があたえられた。また同年フィレンツェの商

人ロベルト・リドルフィ Roberto Ridolfi によるエリザベス殺害の陰謀事件が未然に発覚し、イギリス政府がその関連者を厳罰に処したことは、セシルの誇大宣伝による反カトリック政策とされているが⁹⁰、イギリス当局が積極的態度をとりはじめた証拠となるであろう。

- 注(1) Meyer, O. Arnold, England and the Catholic Church under Queen Elizabeth, 80. 教会法では破門の予告を必要とするのは *excommunicatio ferendae sententiae* であり、異端が明確に知れている場合の *excommunicatio latae sententiae* と区別している。
- (2) イングランド女王の僭称者エリザベス Elizabeth, Pretensa Angliae regina…… (勅書原文参照)
- (3) Meyer, *ibid.*, 82-83.
- (4) 一六〇五年 Gunpowder Plot
- (5) 一六七八年 Papist Plot
- (6) 教皇権力が列国を動かした例としては、一六〇六年教皇バウロ五世がベニス共和国をインターディクトしたとき、すべてのカトリック宮廷はベニス大使との交渉を停止したことがあげられる。Meyer, *ibid.*, 86.
- (7) ハンザ諸都市がイギリス商人をポイコットしたのは、純粹に商業上の問題でエリザベスとローマの断絶とは時期的にずれており、エリザベスにとっては幸運であった。
- (8) マドリッドにて教皇使節 Giovanni Casagno (後の教皇 Urbanus VIII) は、エリザベス破門の数カ月後フェリペ二世に面会し、大陸封鎖によって勅書の効果を出すよう要請した。
- (9) An Act against the bringing in and putting execution of bulls and other instructions from the see of Rome, 1571, 13 Eliz. I, C. 2. (Turner, *Tudor Constitutional Documents*, 414.)
- (10) フォリッパ・ヒューズによると、セシルはリドルフィが陰謀をメリーとノーフォークに提案し承認を得て、その援助を教皇とスペイン王に訴えんとしたというのは大変な誇張であり、明瞭なことはこの件に一人のカトリック教徒もかわりなく、一五七二年四月リドルフィがローマに来たとき、教皇が彼になしたことはスペイン王に紹介状をもたせただけという。Philip Hughes, *The Reformation in England*, vol. II, 278.

二 大陸におけるイギリス神学院^{コレジ}

(1) ドゥーエー神学院の建設

イングランドにおけるバリー卿のカトリック対策の目標は、明らかにその完全崩壊にあった。彼のとつた手段はカトリック国がプロテスタントに対して従来とつて来た異端糾問であり、すべての法がそれに向つて強化された。しかもなおカトリシズムを根絶出来なかつた理由は、大陸におけるイギリス・カトリックの基地ドゥーエー・コレジ Donai College の存在と、そこから派遣されてイングランドに潜入した宣教師^{ミッショナリアー}祭達の活動によるものである。イギリス・カトリシズムの衰退はこの宣教開始とともに終り、宗教心の復活が迫害と呼応して起きたといえる。

本国においてカトリック司祭の養成が不可能になつた以上イングランドにおける司牧・宣教の仕事は、外国で養成された司祭が本国へ潜入して行う以外にすべはなく、その要望に応じて出来たのが、イングランドから大陸へ亡命中のカトリック教徒によるセミナリひいてはコレジの建設であつた。地の利からみてイングランドに近いスペイン領ネーデルラントが選ばれ、とくにウィリアム・アレン William Allen (1532-1594) によつて創設されたドゥーエー・コレジがその中心となつた⁽²⁾。アレンはオックスフォードに学び二十六才でエリザベスの宗教改革に際し、新秩序に従うことを拒否して多くの者とともにネーデルラントに逃れ、当時トレント公会議においても考えられていた司祭養成機関として、一五六八年私財と寄附を頼みとしてドゥーエー・セミナリを開き、コレジ設立の基礎をつくつた。当初はイングランドにおけるカトリック解禁の日を目指して司祭養成を志していたが、禁制下に強行潜入するという方向に飛躍し、そのいみでは予期以上の成果といえる。爾来きびしい禁教の二〇〇年間、フランス革命にいたるまでこ

Douai のイギリス・コレジの絵図 (1627年)
“AMIS DE DOUAI” No 3, 1968, 47p.

の地はイギリス・カトリシズムの中心となり、迫害による重くなるしいイギリス史の焦点をなすにいたった。ヘンリー八世及びエリザベスによって破壊された修道院がこの地に芽生え、エリザベス時代とスチュエート時代を通じて大陸に出来た約四〇のイギリス系カトリック施設⁽⁶⁾の大部分がこの地に集中した。したがってイングランドにとってはローマよりも縁の深い思い出にみちた第二の故郷といわれている。

このような大陸のイギリス・カトリック基地及びルーヴァンにおける亡命者グループによる文書活動が、本国の注目するところとなり、監視の対象になったのはいうまでもない。エリザベス即位以来許可なくして国を去ったもの、予定の日に帰国しなかったもの、家と財産の没収は制定法になっていたが、それが改訂されて、財産をなくした者も悔悟して国教会に服し一年以内に帰国した者には、没収財産が返却されることになった⁽⁷⁾。それが非国教徒全般を対象とするもの、主として亡命カトリック教徒を目標にしたことは明白である。しかしこの法の効果は知られておらず、とくにドゥーエーからの帰順は皆無とされている⁽⁸⁾。

ドゥーエーの教育は⁽⁶⁾、倫理・哲学・教義など司牧神学が行われるほか、説教・修辭・プロテスタント教義など反宗教改革のためにそなえた宣教訓練も行われ、イギリス教会の伝統に立ち、トレント公会議の精神やイエズス会の精神が支えとなった。中でもイエズス会の影響が強く、財的のみならず、ドイツ人として初のイエズス会士たるベトル

ランス版新約聖書 (1582) のタイトル
ランス・ビブリオテーク所蔵

ス・カニシウス Petrus Canisius (1521-1597) のカテキズムが教科書として用いられた。一五七三年四名の司祭がはじめて叙階され、翌四年その四名はイングランドに赴いた。つづいて四年間に七十五名が叙階されその中五十二名がイングランドへ向った。エリザベス治世中このコレジからイングランドへ送られた司祭総数は四百三十八名といわれ、その中九十八名が処刑のされている。この期間に処刑されたイングランドのカトリック教徒の総数およそ三百(うち百二十四が聖職)であるところから、ドゥーエー出身司祭の犠牲の比重はまことに大きいといわねばならない。

一五七五年教皇グレゴリウス十三世はこのコレジに年金をあたえ、またドゥーエーを目標して亡命してくるイングランドのカトリック子弟が多いため、創立者アレンはローマにもイギリス・セミナリを創設し、一五七六年には四〇名の学生をローマへ移した。一五七八年フランダースに起きた反カトリック運動のため、ドゥーエー・コレジはギーズ家の保護のもとにフランスのランスへ移転し、一五九三年まで十五年間をこの大学都市で過すことになった。財政的危機をのりこえつつこの間一五八二年、アレン監修の下にカトリック教会として最初の英語訳新約聖書^⑥、ついでドゥーエーにおいて二巻にわたる旧約聖書^⑦(一六〇九年第一巻、一六一〇年第二巻)を完成した。この聖書はラテン語ヴルガータを底本としているが、後にジェームズ一世の欽定英語聖書にも影響をあたえていることで知られ、ドゥーエー・コレジの学的水準を示す注目すべきものである。

(2) 殉教教育

ローマのイギリス・セミナリはグレゴリウス十三世の拠金により、一五七九年コレジに発展し多くの年金^⑧を得て一五八五年には学生七〇名を擁するに至った。ローマ及びドゥーエーにおける司祭養成は^⑨、イングランドから亡命してくる上流家庭の子弟が多く、入学資格は十四才から二十五才にかぎられ、身体強く非のうしろでない行為と氣

立てのよさが要求された。この神学院の特色として、司祭の召命をうけたとき、イングランドへ渡り人々の魂の救済のために働くことを入学に際して新入生に誓わせることであつた。そのために家庭・友人を忘れ、地位・財産を捨て、謙讓のうちに高い目的と誇りをもって日々の生活を送つた。修練に関してはイエズス会の厳格な方法がとられ、勉強・討論のほか黙想と祈祷、良心の吟味が徹底して行われた。それはいかなる迫害にあうとも殉教者として最後を飾る意志を養うため、部屋の壁には拷問や断頭台の絵が画かれ、同僚間の挨拶には「栄ある殉教者ごきげんよう」Salvete Flores martyrum¹が交された。祖国を異端と侮蔑の呪いから解放するために、彼らは神の恩恵によって、破滅の中から最後に残つたものとして、最も高貴な仕事に召されたという自覚が、感受性の強い青年の心をとらえ、地上におけるただ一つの価値あるもの「殉教」へと彼らを追いたてた。「致命人(殉教者)の血は奉教者の種なり²」が宣教者達の真の願いであるなら、ここほど光栄ある成果を収めたところは他に存しないであろう。拷問器具に接吻し、絞刑吏を祝福し、絞首台のはしごに抱擁するという、それは信仰の世界において人間性にうちかち、キリストの真理を宣明する証人たらんとした崇高な殉教教育であつた。ドゥーニーが殉教神学院 Seminarium Martyrum と呼ばれる所以である。

一方この厳しさに耐えかねて脱落するものもあつた。指導者の徹底した靈的教育が、学生の心の中をさぐり出しために、同僚間に密告者が出来て同僚間の感情の対立が生じ、うけた罰に対して改心するどころかかえつて憎悪と嘲笑をかもし出したという批判も行われている³。さらに指導的役割にあつたイエズス会士が同会への入会をすすめ、会士をエリート扱いするために他の在俗司祭^{ネキヤラリス}の反感を買うこともあつた⁴。その結果彼らによるイエズス会士排斥の運動が起き、教皇庁から二度にわたつて(一五八五年・一五九六年)実情調査のため巡察が行われた⁵。その結果イエズス会の落度はみとめられず、一五九七年にはスペインの同会士ロバート・パーソンズ Robert Parsons (Parsons

イギリス・カトリックの施設

ドゥーエー神学院の活動と迫害

1546-1610) が最高指揮権をあたえられてローマのイギリス・コレジへ赴任して来た。彼の敏腕によって一時統一をとりもどしたものの、この種の不和が大陸のイギリス・コレジ全般にみられ、イギリス・カトリックを二分する不幸な要因として伝わったのである。

(3) その他の施設

ドゥーエー、ランス、ローマの司祭養成機関にはイングランドから亡命青年の志願者があとをたたず、施設が狭小になり資金の不足する状況がしばしば起きた。しかし同じ条件にあるスコットランドについては状況が異なる。イングランドのウィリアム・アレンの仕事は、スコットランドの場合イエズス会士ウィリアム・クレイトン William Creighton が行なった。彼はローマの援助を得てスコッチ・セミナリを建てたが、イギリス・コレジのような好結果はうまれなかった。その原因はイングランドにみられるような愛国の青年の志願が少なく、一五七六年ネーデルラントのトゥールネー Tournai のセミナリにはじまり、約四〇年間に六カ所⁶⁴⁾のセミナリを開くが、成果は香しくなかった。

イングランドのカトリック教徒支援は、ヨーロッパ列強の中でもハプスブルグ家の政策として重視され、フェリペ二世もそれをうけついで。王によるイギリス・コレジ援助は、年間二〇〇ダカット Ducats をドゥーエーに与え、また施設の狭隘をみかねて第三のセミナリをスペイン本国に設けた。一五八八年アルマダが撃滅せられた直後、フェリペ王はパーソンズのすすめでバリャドリード Valladolid (一五八九年)、セビリア Sevilla (一五九二年) にイギリス・コレジを設け、三年後前者には七十五名の学生を擁するにいたった。セビリアのコレジもスペイン国家・市政府・教会からの援助を得て、それに劣らぬ成長をとげた。このほかマドリッド、リスボンにもイギリス関係の施設が

出来た。

ところでスペイン政府の援助によって生れた司祭は、カトリック司祭であると同時にスペイン王にも好意をもつことになる。したがってプロテスタント・イングランドからみれば、カトリックとスペインは同一物であり、それにイエズス会も加わってこの二者はともにイングランドからは国民主義的立場から敵視されることになった⁹⁰。

注(1) 宗教戦争の時代にはカトリック、プロテスタントを通じて、大なり小なり異端糾問が行われた。しかしイングランドにおいては、フランスのサンバルテルミーやアイルランドの新教徒殺害のような大々的なものはみられない。

(2) 現在フランス国内にあるドゥーエーにおいて、イギリス・コレジの場所(Place Carnot)は判っているが建物は存在していない。しかし同市にあるサン・ペトロ大聖堂にはイギリス・コレジ出身の殉教者の遺骨・遺品が保管されている。また一九六八年にはイギリス・コレジ建設四百年祭が同市で行われ、イングランドから代表者が来て荘厳ミサと講演会が催された。同市の観光協会発行の機関誌「ドゥーエーの友」にはイギリス・コレジの四百年の歴史と右のセレモニーの状況が報告されている。Le Collège des Anglais 1568-1968, par Jean Flayelle, 46-49. Les Cérémonies du Quatrième Centenaire du Collège des Anglais, 51-57. (Amis de Douai, No. 3, 1968)

筆者は一九七五年五月ドゥーエー・ランスを訪れビブリオテークを中心に現地調査を行った。ランスでは現在養老院に使われている建物中に十七世紀イエズス会の所有した図書室を見ることが出来た。

(3) ドゥーエーにははじめの五〇年間に、イングランドの在俗司祭養成のコレジの外に、スコットランドのイエズス会とフランシスコ会、アイルランドのセミナリ、さらにイングランドからベネディクト会とフランシスコ会もコレジをつくった。

(4) Meyer, *ibid.*, 96.

(5) *ibid.*, 97.

(6) *ibid.*, 97, 98.

(7) Hughes, *ibid.*, vol. II, 293.

(8) ランス版新約聖書は図版参照

- (6) ドゥワーニー版旧約聖書のタートン・ベーンシが The first (second) Tome of the Holy Bible faithfully translated into English, out of the authentical Latin. Diligently conferred with the Hebrew, Greeke, and oher Editions in divers languages. With Arguments of the Books, and Chapters, Annotations, Tables: and other helps, for better understanding of the text: for discoverie of Corruptions in some late translations: and for clearing Controversies in Religion. By the English College of Douay... Printed at Douay by Laurence Kellam, at the signe of the holie Lambe. M.D.C. IX (X) (ドゥワーニー・コトリオナーク所蔵)
- (11) ドゥワーニーの三倍にあたる年間三六〇〇 gold scudi と、年間三〇〇〇 ducats の収入のついでたサン・サビノ大修道院をコレシに与えた。
- (11) Meyer, *ibid.*, 100f.
- (12) 日本二十六聖人の殉教録「鮮血遺書」原本にみられる標語
- (13) Meyer, *ibid.*, 105.
- (14) *ibid.*, 111. イエズス会士になる予備的信心会“Sodality of the Blessed Virgin”に入会することがヘリットとして別格に扱われた。
- (15) Cardinal Sega を長とする視察団が訪れ、双方の訴えを聴取した。
- (16) Tournai, Pont-à-Mousson, Douai, Louvain, Antwerp 地図参照
- (17) セビリアの町はイギリス・コレシに年間六〇〇 ducats を十年にわたって支出した。
- (18) マイヤーは在俗司祭とイエズス会士の対立を国民主義対反国民主義としているが、マイヤーの英訳書（一九六七年版）に序説を執筆したジョン・ボッシー John Bossy はその二分法に批判的で、十六世紀の国家に忠誠か否かの問題は即在俗司祭対イエズス会士の問題ではないとした。Meyer, *ibid.*, XXVII.

三 インجلتراにおける迫害の開始

(1) 宗教改革運動の推移

十六世紀ヨーロッパには宗教的世界統一の崩壊というキリスト教世界の大問題がある。中世以来西欧において単一の教会組織を有したローマ・カトリック教会に対して、ルーテル派、カルヴィン派、英国教会など新教教会が、一五二〇年から一五七〇年のいわゆる宗教改革期に誕生した。それに対してカトリック教会の立直りは、いわゆる反宗教改革としてイエズス会の設立（一五四〇年）、トレント公会議（一五四五年—一五六三年）によってすすめられ、爾来ヨーロッパの政治問題にはこの新・旧キリスト教会の対立が平行して、いわゆる宗教戦争時代（一五四〇年—一六三五年）を醸成した。その間宗教と政治は分離されることなく、それぞれ為政者は国内の宗教統一を目標とし、支配者の宗教が支配地に行われる *cujus regio ejus religio* という原則が生じた。しかし領内にいる反対者に臨む態度は比較的中庸な手段（勿論当代の意味における）を選ぶのがつねであった。インランドもエリザベスの国教会再建と国王至上法に服従しない司教・司祭に対しては投獄の処置をとったが、秘密裡にミサを捧げ、またそれに出席することとは黙過され、ときにミサ出席しただけで多くのカトリック教徒が投獄されたのは例外に属する。エリザベス治世のはじめの十年間は、政府は政治情勢に立脚して自らの力と安全を考慮し、反対者に対する迫害は慎重な態度をとった。したがってその間インランドのカトリック教徒には正規の組織立った司牧が行われないまま、彼らの中には国教会に出席する習慣が生じた⁽⁴⁾。孤立状態に陥った彼らが良心に妥協を求めた結果であり、また母国語によるつとめに満足を覚えるものもいた。しかるに反宗教改革が進展し新旧両教会の対立が厳しくなるにつれ、信徒にも、それに

対応する政府にも様相の変化が起つた。

破門勅書が政治的に大きい失点を示したことは前述の通りである。しかしこの勅書がイングランドのカトリック教徒に、いま一度彼らがカトリック教会の子であることを意識させるきっかけを与えたことも確かであろう。ついで一五七四年はじめてイングランドの土を踏んだドゥーニー出身の宣教司祭は、その後次第に数を増し、一五八〇年イェズス会によるローマからの宣教が行われたときにはすでに彼らの数は百名に達していた。彼らの活動は一小宗団としては考えられないほどの影響力をもち、その自信と誇りは全イングランドのカトリック教徒の称賛の的といわれている。彼らの仕事は新しい改宗者をつくつたということではなく、去就に迷っていた信徒にカトリック教会にふみとどまる決意を与えたことにあり、その後厳しい禁教と迫害の下にも多くの信徒数を保ち得た原動力をなすものといえよう。ドゥーニー・コレジに亡命した学生のプロテスタントの親は、息子を背教者として親子の縁を切り、息子は、殉教気構えで親に反抗した。このような宣教司祭の仕事は、カトリシズムとプロテスタントイイズムの間に明確な障壁をたてることにつきるといえる。ついで一五八〇年にローマから行われたイェズス会の宣教はさらにその傾向を助長した。

すなわち宣教司祭と目醒めたカトリック教徒は迫害を恐れず、プロテスタントイイズムに対する非妥協的態度を明らかにした。宣教者達の目的は、魂の救済とカトリシズムの普及であり、信徒をアングリカンのサーヴィスに参加させないという宗教上の良心問題に限るとするが、勅書がエリザベス女王に統治権を認めないとすればそれは重大な政治問題を意味し、プロテスタントのイギリス政府はカトリシズムの抑圧にその点を利用して宣教者達を勅書の実行者、煽動者、スパイ、女王暗殺の陰謀家ときめつけて強圧を加えた。かくて教皇に対する服従は女王に対する叛逆となり、カトリック教徒は信仰か国家かの選択を迫られる身となった。

(2) グレゴリウス教皇の釈明

ピウス五世をついだ教皇グレゴリウス十三世 Gregorius XIII (1572-1585) は、この新事態に賢明に対処しなければならなかった。イングランドのカトリック教徒を救済せんとして発せられた勅書が、逆に彼らを困惑の底につき落したとすれば、ローマにおいても彼らを救済するためには、勅書にかかわらずイングランドのカトリック教徒は女王陛下をみとめるべきであるという考えが生じた。その線にそってあらわれたのがグレゴリウス教皇による勅書解釈である。教皇はかねてからイギリス国民と友好的であった。しかし勅書を無効にすること、女王に対する忠誠を合法化することは勅書の破棄をいみするので、ともに教会の権威が許さず、唯一の道はイングランドのカトリック教徒に勅書を無視することをしずかに許すことであつた⁶⁾。

右の趣旨を宣教司祭達に伝える方法として、一五八〇年四月十四日、パーソンズとカンピオン Edmund Campion (1540-1581) がイングランドへ旅立つ機会に、グレゴリウス教皇から彼らに特別権能が⁷⁾与えられた。すなわち勅書はエリザベス及び異端者を束縛するが、事柄がそのまま存続する間は、該書の公けの実施が可能になる時期まで、カトリック教徒を束縛することはない。"いいかえれば、エリザベス及び彼女の異端の臣下は破門による罪をこうむる一方、カトリック教徒は、勅書にある女王罷免の判決がそれを実施する人を見つかるまで禁制をとかれ、女王に忠実になることが出来る。すなわち勅書は取消さないがその実施を延期するというのである。

しかしこれに対するイングランドの反応はまたローマの考え通りにはならなかった。それどころか、バリー卿はこの一時的女王承認に疑惑を抱き、将来女王に対する陰謀を成就するため外面的服従と秘密の裏切りという叛逆的性格を指摘し、宣教司祭達を抑圧するための反ローマ政策の口実となした⁸⁾。女王に忠実をよおうイングランドのカ

トリック教徒が、すべての利点を獲得したあかつきに女王殺害の陰謀に蜂起するものと宣伝したのである。

右の特別権能を補足するものとして、前記二人のイエズス会士は同会の総長からインストラクション指令をうけていた⁶⁾。それによると宣教司祭は政治に介入することを蔽禁され、政治の代理者、外交の仲介者、情報提供者として行動することが差しとめられた。逮捕されたカンピオンは処刑の直前裁判官に向つて、私の責務は自由に福音をのべ、秘跡を行ない、無知な人を教育し、罪人を改心させ、過誤を論破することである。”私の長上は国家の政治問題に関与することを蔽禁し、それは私の職務でなく、私の関心事でもない。”と証言している⁶⁾。しかも彼は、彼をかくまったカトリック教徒の姓名を聞き出すための拷問をうけ、女王暗殺を企画したと曲解されてタイバーン刑場の露と消えた⁶⁾。

注(1) 一五六一年六月の事例。Meyer, *ibid.*, 124.

(2) 一時的に国教会出席する“仮の国教徒” Occasional Conformist “国教会に従うローマ教徒” Conforming Papist などと呼ばれる。

(3) エリザベス朝のカトリック教徒の教は、めまぐるしい時代の変遷と本来の性格のためにその把握は非常に困難とされている。その吟味は別の機会に譲るとして、エリザベス朝のはじめ、少なくとも多数派であったものが治世の半ば過ぎには急激に減少し、おそろく十万程度ではなかつたろうか。シェームズ一世治世には世帯主だけで二万七〇〇といわれているから、(Kenyon, J. P., *The Stuart Constitution*, 448.) 最低この程度に持続し、十九世紀カトリック教徒解放令による復興の機会を得てその数は飛躍的に恢復した。統計上それをうかがうと、1790年 70,000, 1821年 160,000, 1837年 400,000, 1851年 900,000, 1931年 2,600,000 (カトリック大辞典—イギリス)

(4) Meyer, *ibid.*, 138.

(5) *ibid.*, 137.

(6) *Facultates concessae Patribus Roberto Personio et Edmundo Campiano pro Anglia die 14 Aprilis, 1580.*

(Meyer, *ibid.*, 486-488)

(7) Meyer, *ibid.*, 140.

- (8) *ibid.*, 142.
(9) *ibid.*, 144.
(10) カンピオンは一五八〇年四月イングランド潜入、翌八一年七月逮捕、タワーにつながれ十二月処刑された。

— 関西学院大学文学部教授 —